

仏教式葬儀・キリスト教式葬儀・非宗派式葬儀が呈示するもの — 現代ロサンゼルス近郊の日系人葬儀の事例を通して —

宮原 文隆[†]

What Japanese American's Funeral Services Present

— A Case Study of Japanese American Funeral in Contemporary Los Angeles Neighborhood —

Fumitaka Miyahara

1. はじめに

本研究の対象は、現代米国ロサンゼルス及びその近郊における日系葬儀社の取扱う葬儀サービスの諸相、特に、一連のプロセスとアクター(関係者)間の相互作用である。

研究の目的は、それらの諸相を民族誌的に記述し、それらの記述から、「葬儀社によってつくられる葬儀」という現代的な通過儀礼が、どのような背景のもとで、どのようなプロセスで、どのようなアクター間の相互作用によって形作られていくのか、これらの問いに答えることにある。

筆者は、日系葬儀社の無給スタッフとして、葬儀ディレクターの下で仕事に従事しながら、2016年3月からの6か月間、参与観察を行い、参与観察ノート及びインタビューの録音内容の文字起こしをもとに、民族誌的なテキストを作成し、このテキストを帰納的に分析した。参与観察した葬儀は28件。本稿では、そのうち7つの事例を取り挙げる。

現代は、葬儀社のサービスなしには葬儀を執り行うことは事実上不可能となっている。そのような状況において、エンバーミングという遺体保存処理(常温で2か月保存可能)に依拠して、葬儀ディレクターの主導で、遺族と聖職者は葬儀のプログラム(式次第)を作成し、葬儀を執り行っている。

ロサンゼルス日系アメリカ人コミュニティをフィールドとしたのは、キリスト教式葬儀と仏教式葬儀及び非宗派式葬儀が行われており、事例比較をする上で、格好のフィールドであったからである。

そこで、これらの3つの葬儀の事例比較から、それらの葬儀にどのような違いがあるのか、あるいはどのような点が共通しているのかについても明らかにした。

以下、2章で参与観察をした日系葬儀社を紹介し、3章で個々の事例を簡単に示す。4章では事例の様相を記述し、

5章では分析と考察を行い、6章で結論を示している。

2. ヤマト葬儀社¹⁾の紹介

2.1 創業の経緯(いきさつ)

およそ100年前、日本からハワイのサトウキビ畑に移住した一世Y氏は、一時的に彼の家族を残して、家族の将来のためのより良い機会を得るために、米国本土のカリフォルニア州ロサンゼルスに渡った。当時、アメリカ人オーナーの葬儀社は、日本人の葬儀については、その文化や慣習に疎く対応できない状況であった。そこで、Y氏を日本人の葬儀を担当してもらうために雇った。数年後、アメリカ人オーナーから所有権を得て、Y氏は1918年にヤマト葬儀社を創業した。

現在のオーナーは創業者から数えて4代目に当たる。

2.2 ビジネスの規模

葬儀カウンセラー/ディレクター10人、アシスタント1人、エンバーマー²⁾2人、モーティジャン³⁾1人、生前予約カウンセラー5人、経理1人、庶務1人である。葬儀カウンセラー/ディレクターは日本語・英語のバイリンガルである。

ここ数年の葬儀の取り扱い件数は、年間平均200件を超える。全米における葬儀社の平均従業員数は8人(フルタイム4人・パートタイム4人)で、年間の取り扱い件数は113件である。それと比較すると、ヤマト葬儀社のビジネス規模は大手に入るであろう。

2.3 予備知識

(1) 死亡証明書(Certificate of Death)

死亡証明書には、医師が死亡診断に関する欄を記入し、

[†] 2021年度修了(人文学プログラム)

¹⁾ 以後、団体名や個人名はすべて仮名である。

²⁾ エンバーミングを行う者

³⁾ 遺体の化粧の担当を行う者

葬儀ディレクターは故人の情報を記入する。それぞれ、氏名とライセンス番号の明記及びサインが必要である。州法では、それらの署名が無いと郡当局からは埋葬許可が下りない。

(2) エンバーミング

エンバーミングとは遺体保存処理のことをいう。米国葬儀教育委員会は「微生物の侵入と増殖を減らし、有機分解を一時的に抑制し、遺体を容認できる外観に遺体を修復する化学的な処理」と定義している (Mayer, Robert 2012, 筆者訳)。具体的には、死体に対して、消毒・殺菌、防腐、修復の4つの措置が取られる。ヤマト葬儀社で行うエンバーミングでは常温で2カ月間保存可能である (但し、死亡する前に身体組織が病気等で壊死していた場合を除く)。

1日の冷蔵保存料金は175ドルで、エンバーミング措置は325ドルある。同社はエンバーミング措置をすれば、冷蔵保存料とそれ以後の遺体保管料は無料にしている。

(3) プログラム

宗教・宗派の如何を問わず、葬儀ディレクターの主導で、遺族と聖職者の間でプログラムが作成される。

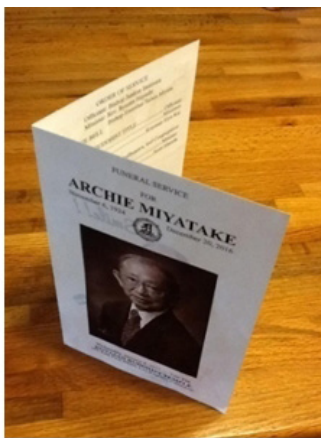


図1 日系二世の一般公開葬儀 (2017年1月4日、ロサンゼルス・リトルトウキョー高野山別院) において配布されたプログラム

プログラムはレターサイズの用紙を二つ折りにして、表紙、内両開き1頁と2頁、裏表紙の体裁をとる。内容としては、葬儀タイトル (表紙)、式次第や故人のプロフィール (内側のページと裏表紙) を記載している。

3. 事例の概要

3.1 キリスト教式葬儀

(1) 事例A

故人は日系一世・享年87歳の女性。死亡当日の内にエンバーミング措置されて、葬儀は死亡後11日目に執り行われた。

(2) 事例B

故人は日系二世・享年103歳。死亡翌日にエンバーミング措置されて、その後9日目に火葬された。葬儀は、故人の死亡後21日目に、教会内の祭壇に骨壺を置いて執り行われた。

(3) 事例C

故人は日系一世・享年92歳の男性。死亡当日の内にエンバーミング措置されて、ビジテーション (遺体との対面) は葬儀の前日午前中2時間ほど、ヤマト葬儀社のチャペルで行われた。葬儀は、故人の死亡後11日目に執り行われた。

以上の事例において、牧師らは「葬儀」ではなく「告別式」を執行していると主張した。「告別式」の基調は、既に召天してしまった死者の、生前のクリスチャン人生を讃美するものであった。

3.2 仏教式葬儀

(1) 事例D

故人は日系二世・享年88歳の男性。死亡翌日にエンバーミング措置されて、葬儀は、死亡から6日目にヤマト葬儀社のチャペルで、真言宗の僧侶によって執り行われた。葬儀翌日に火葬があり、遺体を取めたのは棺ではなく、段ボール製コンテナであった。

(2) 事例E

故人は日系一世・享年84歳の女性。死亡翌日にエンバーミング措置されて、死亡後の14日目に浄土真宗派の寺院で執り行われた。遺体が火葬されたのは葬儀の翌日であった。

(3) 事例F

故人は日系二世・享年84歳の女性。死亡当日の内にエンバーミング措置されて、5日目にビジテーションがあり、翌日に火葬された。葬儀は、故人の死亡後22日目に、浄土真宗派の院で執り行われた。故人は火葬の生前予約をしており、棺の代わりにダンボール製のコンテナを注文していた。

以上の事例では、葬儀の基調は死者が無事に彼岸 (またはあの世) に逝くことを祈念するものであった。

3.3 非宗派式葬儀

(1) 事例G

故人は日系二世・享年83歳の女性で、非宗派式葬儀 (“Non Denominational”) の事例である。「非宗派式」といっても霊や魂の存在は信じている人々が参集して行われる葬儀であるので、いわゆる無宗教式葬儀とも異なる。非宗派式葬儀専門の司式者が葬儀を執り行った。

仏教式葬儀・キリスト教式葬儀・非宗派式葬儀が提示するもの
— 現代ロサンジェルス近郊の日系人葬儀の事例を通して —

遺体は死亡当日の内にエンバーミング措置されて、数日後に火葬された。葬儀は故人の死亡後12日目に、ロサンジェルス郊外の霊園チャペルで執り行われた。葬儀後、直ちに埋葬式が行われた。

上記の事例においては、司式者のメッセージの基調は、死者は遺族や会葬者の心の内に「存在」しているというものであった。

4. 事例の様相

4.1 葬儀前日までの準備

遺族の第一報から葬儀前日までは、次のようなことが観察された(図2)。

人が亡くなると、遺族は葬儀社に第一報(ファースト・コール)を入れる(①)。第一報を受けた葬儀ディレクターは遺族に遺体保存その他のサービス料金を提示する。遺体保存については、遺族は例外なくエンバーミングを選択する。

遺体が搬送されると(②)、エンバーミングの措置が施される(③)。

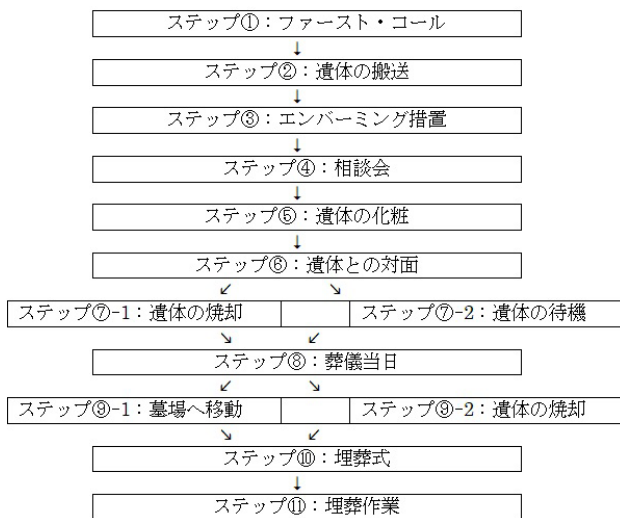


図2 葬儀の一般的な流れ

故人死亡後の翌日か翌々日に、遺族は葬儀ディレクターと葬儀社で相談会をもつ(④)。葬儀ディレクターは第一報や相談会で得た情報をもとに相談会が終わるまでに、葬儀の式次第のプロトタイプをプリントして、葬儀のイメージを可視化して遺族を安心させる。

以後、遺族と聖職者/司式者はそれをもとにして葬儀を組み立てていく。

相談会の後、エンバーミングされた遺体に化粧が施される(⑤)。そして、遺体との対面(ビジテーション)が行

われる。

葬儀当日までに遺体が焼却される場合(⑦-1)と、そうでない場合がある(⑦-2, ⑨-2)。

火葬の場合、ほとんどにおいて、棺の代わりに段ボール製のコンテナが使用される⁴⁾。遺族は、段ボール製コンテナに収納した遺体をビジテーションや葬儀に用いることについては躊躇を露わにする。そこで、葬儀ディレクターは、オンザベッド(On the bed)という方式を提案し、遺族はその提案に飛びつく。

オンザベッド方式では、テーブルに白い布を掛けて、その上に遺体を仰向けに置き、その周りに花を添えるセッティングにする(図3)。

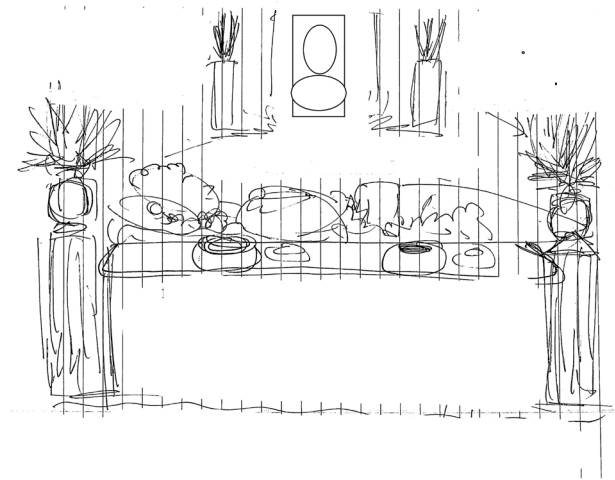


図3 遺族に提案したオンザベッドのイラスト

事例Eでは、遺族の間で内紛があり、父親の参列を息子らが拒む主張を再三繰り返してきたが、最後には、葬儀ディレクターは「自分がキレたら葬儀はできないよ」と、一喝したという。

葬儀当日(⑧)については、次節以降で論じる。埋葬式(⑩)と埋葬作業(⑪)については、本稿では割愛する。

4.2 葬儀当日の葬儀直前までの動き

当日の葬儀直前までには、以下のことが観察された。

葬儀社から棺を式場に搬送する際、葬儀ディレクターは遺体の点検だけでなく、棺にも瑕疵があるかないかを点検する。

葬儀ディレクターは、遺体について「ひとつの商品なのよ。ディスプレイの商品なのよ。良く出来たときは、みんな喜ぶわけ。(中略)ディスプレイの商品をいかに綺麗にするかっていうのも仕事なの」と言う。

牧師が式場となった礼拝堂で、葬儀でディレクターに「どのようにセットアップしたらよいか、わからない」と言って、遺影写真、講壇、自分の座る椅子、花輪、マイ

⁴⁾ 生前予約で当コンテナを注文していた故人もいた。

クロフォンなどの位置についてアドバイスを求めた。葬儀ディレクターは傍らにいた教会メンバーに、それぞれのセット位置を伝えて、彼らに作業を指示した（事例A）。

葬儀ディレクターは、必ず、葬儀開始45分前頃と15分前頃に遺族をファミリールームに集合させて、各自にプログラムを手を持たせ、読み合わせしながら、葬儀の段取りを徹底させた。

骨壺と遺影写真が一緒に祭壇にセッティングされているのが不満の牧師がいた（事例B）。遺骨を拝む会葬者がでてくることを予想して、それはキリスト教で禁じる偶像礼拝になるので、骨壺を撤去して欲しいという。葬儀ディレクターは、のらりくらりと返答しながら、遺族の希望であるとして譲らず、最後は、遺骨を撤去することなく、遺影写真から数歩隔たったところに置いた。牧師は不満気に立ち去った。

4.3 葬儀の執行

当日の葬儀では、以下のことが観察された。

いずれの葬儀においても、それまで葬儀の準備を主導的に取り仕切っていた葬儀ディレクターに代わって、聖職者/式司者が葬儀を執り行った。

事例Bにおいて、最後の式目の「告別」の始まる前、葬儀ディレクターは、（葬儀社のスタッフである）調査者に、会葬者の先頭に立って骨壺に向かって進んで、骨壺の前で軽く頭を下げるようにと言った。調査者の後に従ってくる会葬者は、調査者と同じように軽く会釈するだけで、骨壺に手を合わせることはないだろう、という目論見である。

一方、牧師は「お別れの時ですね、写真とお骨がありますけれど、それを拝まないようにしてください。クリスチャンはそれをしません。もう、ケイコさんは天国に入っていますので、どうぞ、それをしないように」とアナウンスをしていた。

5. 分析と考察

5.1 宗派間の葬儀の比較

(1) プログラムの参照枠

3種類（キリスト教、仏教、非宗派）の葬儀の式次第を表1に示す。

プログラムの参照枠は、キリスト教式葬儀の場合、日本基督教団信仰職制委員会（2006）の『式文（試用版）』にみられる。

仏教式葬儀の場合、日本仏教連合会は、葬儀諸式という

よなものを定めておらず、各宗派が独自の式目を持っている。ここでは、事例で取り挙げた浄土真宗東本願寺の標準諸式⁵⁾が参照枠に相当しよう。

キリスト教式葬儀	仏教式葬儀	非宗派式葬儀
招詞/前奏	喚鐘	序
讃美歌	読経	歓迎
献花	焼香	
故人の思い出	故人の思い出	
故人略歴	故人略歴	故人略歴
ビデオ・トリビュート	ビデオ・トリビュート	ビデオ・トリビュート
頌栄		
祝祷		謝辞
説教	法話	連絡
感謝の言葉	謝辞	告別
告別	出棺	祝祷

表1 式次第の式目

非宗派式葬儀の場合、式目は「序」「歓迎」「故人の略歴」「ビデオ・トリビュート」「謝辞」「連絡」「告別」「祝祷」の8つである。明らかにキリスト教式葬儀を参照枠としている。

(2) 式目を「行為」の視点で見る

キリスト教式葬儀には、他の葬儀とは異なる「頌栄」⁶⁾と「祝祷」⁷⁾という式目がみられる。これは、キリスト教の日曜礼拝で必ずおこなわれる宗教教義に特有なものである。

表2は、表1と似た表であるが、キリスト教と仏教の式目を「行為」の視点から対比したものである。

キリスト教式葬儀	仏教式葬儀	行為
招詞/前奏	喚鐘	合図する
讃美歌	読経	たたえる
献花	焼香	ささげる
故人の思い出	故人の思い出	思い出を語る
故人略歴	故人略歴	略歴を語る
ビデオ・トリビュート	ビデオ・トリビュート	ビデオを上映する
頌栄		斉唱する
祝祷		祈る
説教	法話	聖職者が語る
感謝の言葉	謝辞	遺族が挨拶する
告別	出棺	別れを告げる

表2 式目と「行為」の対比

キリスト教と仏教の宗教教義は大きく異なるものでありながら、「行為」の視点で視ると、それぞれの葬儀の形式面においては、「頌栄」と「祝祷」を除いて、キリスト教

⁵⁾ 東本願寺ロサンゼルス別院ホームページ, [https://hhbt-la.org/?page_id=352#funeral, 2020年10月30日閲覧]

⁶⁾ プロテスタントで、三位一体の神をたたえ、栄光を神に帰する歌

⁷⁾ 儀式の終わりに牧師が会衆のために行う祝福の祈り

式・仏教式・非宗派式の間には差異はないといえる。

5.2 広義の〈葬儀〉

7つの事例では、死亡日から最短で6日目に、最長で22日目に葬儀が執り行われている。一方、当日の葬儀は1時間から2時間の出来事である。したがって、葬儀事例を分析する上で、当日の葬儀の場だけに限定せず、葬儀作りに向けて行われたプログラム作成や当日の準備作業も分析の対象とするのが妥当であろう。そこで、第一報から葬儀前日までの期間および当日の準備作業も含めて、広義の意味での〈葬儀〉と見なして、その様相を、アクター間の相互作用を中心に分析・考察する。

葬儀ディレクター・遺族・聖職者/司式者に加えて、死者も葬儀に関わるアクターである。

5.3 葬儀の準備と当日 — 葬儀ディレクターと聖職者の関係

(1) 第一報から葬儀前日までの期間

葬儀ディレクターは、実質的に遺族にエンパーミングを選択させている。以下に説明する。

ヤマト葬儀社はエンパーミング措置をすれば、冷蔵保存料とそれ以後の遺体保管料は無料としている。実際、死亡後2日目に葬儀を執り行うのは不可能であるから、冷蔵保存を選択した場合、少なくとも2日間の料金(350ドル)はかかる。現実的には、いかに迅速に対応しても、葬儀までには数日かかるのが実情ある。その分、冷蔵保存料金は膨れ上がっていく。一方、エンパーミング措置をすれば325ドルで済む。したがって、遺族にとってエンパーミング措置は経済的に合理的な選択となる。

一方、葬儀ディレクターは「(エンパーミングは)うちらにとっちゃあ、仕事が楽になるね」と言う。明らかに、エンパーミングは、葬儀ディレクターにとって、仕事の時間管理に有効な手段といえる。例えば、往々にして、葬儀は週末に集中するが、既に式場が予約済みであっても、遺族と相談して数週間後にでも葬儀日を先送りすることが可能となる。すなわち、「エンパーミング措置をすれば、冷蔵保存料とそれ以後の遺体保管料は無料」というポリシーは、葬儀ディレクターの便宜のために、遺族にエンパーミングの選択を婉曲に「強いる」ことにもなっているといえる。

葬儀ディレクターは、まず、遺族にプログラムのプロトタイプを遺族に提示する。遺族と聖職者/司式者は、

その草案を受けて、葬儀の式目を協議して決めていく。その中で、遺族は葬儀ディレクターにメールでフィードバックする。

葬儀ディレクターは、プログラムを形作っていく上で、メールの発信相手は喪主だけでなく、遺族の孫らを含むメンバーにもCCで発信して、遺族を巻き込む。同時に、葬

儀以外のトピック(例えば、若いころ寿司職人であった話や自らが寿司を握る動画)も載せて、遺族との親密な関係を醸成する。

以上から、葬儀ディレクターが葬儀の準備を主導しているといえよう。

一方、聖職者は、葬儀における宗教教義に関わる事柄について、違反行為がないように、遺族に注意や指示を与えている。

(2) 当日準備作業の場面

聖職者は次のように語る。「葬儀社がマネージャーであり、葬儀社の方が、全てのお膳立てを)」している(事例C)。「葬儀屋さんが、式次第のようなものを作ってくださいますので(中略)遺族とのミーティングはしなくて、オーケーということがあります」(事例D)。以上から、葬儀ディレクターは監督者といえよう。

葬儀ディレクターは、自分では作業には直接に手を付けず、(遺族が指名した)受付係や案内係に指示を出して彼らを動かす(事例A)。葬儀開始前に、遺族を2回招集して葬儀の段取りを徹底させる。

事例Bでは、牧師は、宗教教義に則って会葬者による偶像礼拝の振舞いを回避すべく、骨壺のセッティングを止めて欲しいと、葬儀ディレクターに詰め寄ったが、葬儀ディレクターは、遺族の希望を理由に牧師の要請は受け付けなかった。

以上から、当日準備作業の場面においても、葬儀ディレクターが葬儀の準備を主導しているといえることができる。

(3) 葬儀の場面

一旦、実際の葬儀が始まると、葬儀ディレクターは「葬式には一切タッチしない」と言明するように、聖職者/司式者が葬儀を主導していく。

準備作業中の聖職者とのせめぎ合では、遺族の希望を尊重した葬儀ディレクターは、葬儀の中では聖職者の意向を尊重する態度に一変する(事例B)。

聖職者/司式者は、故人の葬送や告別の式目を勤めるだけでなく、宗教教義にもとづく禁忌を訓導したり、会葬者を伝道や布教の対象としてメッセージを説いたりもする。

5.4 アクター間の相互作用

〈葬儀〉が、どのようなアクター間の相互作用によって形作られていくのか。図4、図5、図6で示す。

(1) 第一報から葬儀当日の直前まで

葬儀ディレクターは、死亡証明書の署名者の一人であることによって、またエンパーミングを遺族に選択「させる」立場にあることによって、強力な「権能」をもつ〈葬儀執行者〉といえることができる(①⑤)。

同時に、プログラム作成やビジテーションにおいては協

働関係にある (③)。

プログラム作成において、聖職者/司式者は、宗教教義に関する式次第について遺族に指示する立場にある (④)。同時に協働関係にもある (②⑥)。

葬儀ディレクターは、聖職者に対しても、骨壺のセッティングに関して、自らの主張を譲ることなかったことで、<葬儀執行者>として振舞ったといえる (⑦)。

葬儀ディレクターにとって、遺体となった死者は<商品>といえる (a, b)。

(2) 当日の葬儀における葬儀執行者

「葬儀が始まると、牧師が指揮、チェアマンですから、そのチェアマンのすることに (葬儀社さんに) 補佐をしていただく」(事例Aの牧師) や「葬儀中は、(自分は) 導師ですから、その場はわたしが焼香を進めていく中心にいて、キュー (合図) を葬儀屋さんに送っています」(事例Dの僧侶) の語りが示すように、聖職者/司式者は、絶対的な力をもつ<葬儀執行者>として振舞う (⑧⑨⑩)。

さらに、「メッセージの狙いは、神様の招きが用意されていますと伝えることです。その意味では、日曜日の礼拝と同じです」(事例Aの牧師) や「一番大事なのは、法話です。ね。(中略) わたしたちにとっては、グッドチャンス。ということは、全く仏教を知らない人たちに、法話をするというチャンスを提供しているわけですね」(事例Fの僧侶) との語りから、聖職者が、葬儀を伝道や布教の場としていることは明らかである。(⑧⑨)。

一方、現代の葬儀においては、遺族や会衆は必ずしも同じ宗派のメンバーとは限らず、多様な価値観をもつ人びとの集まりであるから、聖職者は宗教教義に反する振舞いが出てくることを懸念して、遺族や会葬者に宗教教義を遵守するよう協力を求めることもあり、遺族・会葬者や葬儀ディレクターは、その要請を受けとめる (⑪⑫)。

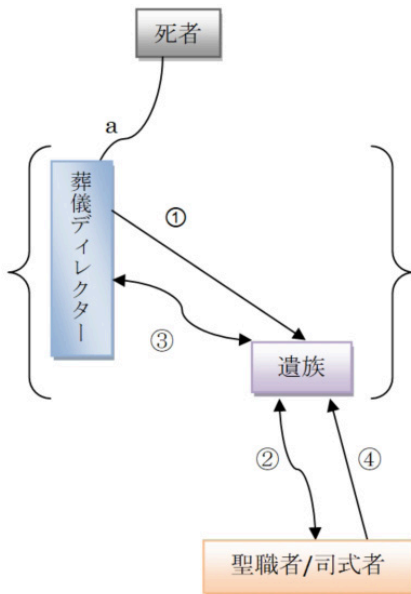


図4 第一報から葬儀前日まで (1~3週間)

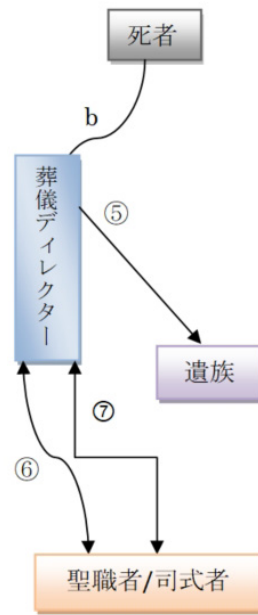


図5 当日の準備作業 (1時間30分)

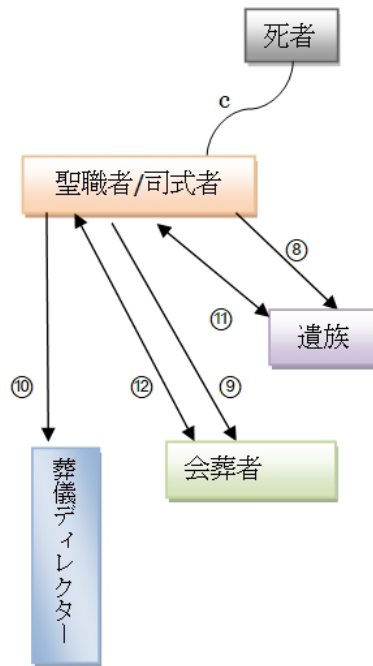


図6 当日の葬儀 (45分~1時間30分)

以下は記号の説明である。

	: 死者との関わり方
	: 主導
	: 協働
	: せめぎ合い。
	: 訓導・順応の関係
{ }	: 業者・顧客の関係

6. おわりに

6.1 事例に見られる通過儀礼プロセス

事例に見られる葬儀のプロセスは、通過儀礼としてはどのようなものであったか。

まず、〈葬儀〉は、遺族からの第一報の電話で始まり、葬儀ないし埋葬式の後の会食会で終る。これらの事例を、エドモンド・リーチの通過儀礼の3局面（リーチ1981）を参照しながら、遺族と死者の二者を取り込んだ通過儀礼のプロセスとして、以下に示す。

遺族は、第一報を入れることで、分離の儀礼にはいる。死者の遺体はエンバーミング措置されて長期保存が可能な状態となる。ビジテーションでは展示物となる。

境界の儀礼はエンバーミング措置から始まるのか、ビジテーション後に始まるのかは曖昧である。死者の存在状態に関して、エンバーミングやビジテーションをどのように見るかで異なるからである。いずれにしても、死者はビジテーション後から葬儀まではどっちつかずの状態（境界の儀礼）に置かれている。

遺族は、相談会やプログラム作成に関わる。したがって、日常生活とは異なる局面に入る。その意味では、境界の儀礼にあるといえるが、相談会やプログラムの作成はPCでの作業や事務的な側面もあり、必ずしも、日常社会から外された状態とはいえない。遺族は境界の儀礼の間、非日常と日常とを行き来するといえよう。

死者は葬儀や埋葬式において、宗教教義に基づき彼岸や天国に統合される。

最後に、遺族は葬儀や埋葬式の後の会葬者を招いての会食会（あるいは弁当の配布）で統合儀礼を踏んで、日常社会へ戻もどる。

6.2 葬儀ディレクターの立場

(1) 死亡証明書の位相

Forsythら（2006）は、葬儀ディレクターと遺族の関係を「コンサルタントとクライアントの関係」と捉えている。例えば、「手配プロセス」では「約束の時間に遺族は葬儀社に来て、葬儀ディレクターと会い、死亡証明書の作成準備をするなど、必要な書類を作成する。また、葬儀の日時や、火葬か通常のエンバーミングかなどの埋葬方法も決定する。ほとんどの事務手続きが完了すると、（遺族は）ショールームに通され、棺や骨壺の選択に入る」（筆者訳）と述べて「コンサルタントとクライアントの関係」を素描している。

しかし、遺族内の意見の相違を解消できない事例において、「電話帳を持ってきて、他の葬儀社を選んでくださいと言ったこともあり（中略）これはたいていうまくいき、彼らは何らかの方法で協力しなければならないことを理解します」（同上）と解説するが、なぜ、遺族に対して葬儀

の受注を断ると言えるほどに、葬儀ディレクターが強気になれるのか、その点については踏み込んだ分析がない。

本研究においても、遺族に内紛があったとき、葬儀ディレクターは「自分がキレたら葬儀はできないよ」と遺族の息子らを一喝した（事例E）。それは、死亡証明書に（医師に加えて）葬儀ディレクターの署名がなければ、遺族は遺灰や遺体を埋葬ができないという機制が存するからである。

すなわち、死亡証明書は、葬儀ディレクターの存在無しには郡当局から埋葬許可は下りないという法的機制そのものであり、葬儀ディレクターは、あからさまにそのことを言明することはないが、強力な「権能」の自覚を保持しているのである。

(2) エンバーミングの意義

北川慶子（2001）は「エンバーミングにより長期間の遺体保存が可能になったため、遺族は、葬儀を依頼する寺院や教会の選定と葬儀の日時や形式、規模などを余裕をもって選択し決定することができるようになり、葬儀の段どり、新聞への死亡広告掲載の、遠方からの会葬者を待つこともできるようになり十分な葬送準備を可能にした」と、エンバーミングの効用を適切に評価している。しかしながら、どのような点において、エンバーミングの意義が存するかについては、言及がない。

これまでの事例分析から、遺族にとってエンバーミング措置は経済的に合理的な選択であるが、それだけでなく、葬儀ディレクターの便宜のためでもあった。その便宜とは、葬儀ディレクターが仕事をこなす上で時間管理をし易くすることであり、その点にこそ、エンバーミングの意義が存するといえるのである。

6.3 事例が呈示するもの

事例における「葬儀社によってつくられる葬儀」という現代的な通過儀礼は、死亡証明書に関わる葬儀ディレクターの「権能」とエンバーミングという遺体保存処理による時間管理の確保を背景にして、第一報の電話から葬儀当日の葬儀の直前まで、葬儀ディレクターは強力な「権能」をもとに、葬儀の準備を主導していく。このプロセスにおけるアクター間の相互作用は、葬儀ディレクターの主導に対して、遺族や聖職者/司式者が順応的に協働していくという構図である。

しかし、一旦、実際の葬儀が始まると、葬儀ディレクターは、葬式には一切タッチせず、聖職者/司式者が葬儀を主導していく。聖職者は、式次第をこなすなかで、布教や伝道のメッセージを発信する。アクター間の相互作用は、聖職者/司式者の主導性に対して、遺族や葬儀ディレクターは順応ないし受容するという構図となる。

宗教教義に沿った予定調和的な儀礼の執行が危ぶまれる時は、聖職者は会衆に向かって、宗教教義を遵守するよう

協力を求める。その場合、葬式直前までは聖職者と意見を異にすることもある葬儀ディレクターは、態度を一変させて、聖職者の思惑や懸念に寄り添い協力する。言い換えれば、葬儀ディレクターは、聖職者の遺族・会葬者への要請に対して、自主的に呼応し、協働する。この場合、アクター間の相互作用は、聖職者と葬儀ディレクター・遺族・会葬者の間の、訓導と順応の構図となる。

3種の葬儀を比較すると、キリスト教式葬儀における2つの式目（「頌栄」と「祝祷」）は、他の宗派の葬儀には見られない特長なものである。しかし、その他の式目は「行為」の視点で視ると、いずれの葬儀でも共通して行われており、その意味では、葬儀の形式面においては、キリスト教式・仏教式・非宗派式の違いはないといえる。このように大きく差異が見当たらないのは、それぞれの葬儀の参照枠の間に共通性が見られるからであろう。

謝 辞

本研究が形になったのは、ご指導くださった指導教員とフィールドワークにおいて協力していただいた方々及び調査の過程でご協力いただいた聖職者/司式者のおかげである。

特に、指導教官である稲村哲也先生からは、研究テーマの絞り方、テーマの提示の仕方、分析・考察の展開について、目が覚めるようなアドバイスをいただき、深く啓発させられた。先生に深く感謝の意を表したい。

本研究の成果は、フィールドワークに協力くださったヤマト葬儀社の葬儀ディレクターK氏に深く負っている。同氏からは、日々の業務について懇切丁寧なご指導をいただいた。K氏に厚くお礼を申しあげたい。

聖職者/司式者の方々からは、時には、数回に分けて延べ30時間以上にもわたるインタビューに応じていただいた。改めてお礼を申しあげたい。

文 献

北川慶子、『高齢期最後の生活課題と葬送の生前契約』九州大学出版会、p.65、2001

日本基督教団信仰職制委員会、『日本基督教団式文（試用版）主日礼拝・結婚式・葬儀諸式』、p.133、2006

Forsyth, Craig J., Palmer C. Eddie, and Simpson Jessica, "THE FUNERAL DIRECTOR MAINTAINING BUSINESS, REPUTATION AND PERFORMANCE", *Free Inquiry In Creative Sociology*, Vol. 34, No.2, [file:///C:/Users/tomok/Downloads/1579-Article%20Text-5794-1-10-20131008.pdf, 閲覧, 2021年11月20日], pp.125-126, 2006

Mayer, Robert, *Embalming: History, Theory, and, Practice, Fifth Edition*, McGraw-Hill Education / Medical, p.6, 2012

リーチ, エドマンド・ロナルド, 『文化とコミュニケーション』, 青木保・宮坂敬造訳, 紀伊国屋書店, p.160, 1981